

カナダの旅に学んだもの



札幌医科大学医師会

形 浦 昭 克

1983年、寒さの厳しい1月29日から2月7日の10日間、アルバータ州との医学交流のため、今は亡き当時の和田武雄学長とともに訪れたのであった。指名された私にとり、緊張と光栄で胸が高鳴り、機上からロッキー山脈山中のバンフおよびジャスパー国立公園を眺め、エドモントンに到着した。

翌日早朝に、先生に連れられてのプロテスタント教会は、生まれて初めての私にとり、荘厳な中に身の引き締まる思いであったことを思い起こすのであった。先生は多くのアルバータ州の人たちと歓談し、将来への夢を語る姿は実に素晴らしく、私にとっても有意義な時であり、多くのことを学んだ。カナダでの多くの医療施設見学の中、とりわけ癌関連の研究施設や病院について触れることにする。

まず、エドモントン市クロス癌研究所を見学することになり、先生は若い研究者や医師とともに予定が過ぎても、癌研究について精力的に議論され、その都度私自身にも刺激を与えてくれたのであった。先生はその外来で看護師、コメディカルスタッフおよび患者さんとの会話を持たれ、積極的にその内容にも触れられ、いわゆる医療における説明と同意であり、インフォームド・コンセントを実践されておられた。私はこれまで、忙しい臨床の中で、多くの患者さんに対し、あまり説明の時間を持たない診療体制に考えさせられた。

次いでカルガリー大学を訪れるに、都心から少し離れたところに羨ましいばかりの広大なキャンパスがあり、いくつもの高層建築が並んでいた。和田先生は医学部長と会われ、続いて積極的に癌研究所を見学し、ここでも多くの研究者と研究の内容についてその課題を徹底的に討論される姿は、まさしくたくましく映った。私共の知りたかった頭頸部癌について討論できたのは、大きな喜びであったことを覚えている。トム・ベイカー癌センターおよびフットヒル病院を訪れ、癌の基礎的研究にエネルギーに努力されている姿は、大きな感動を受けた。

私が最も驚かされたのは、フットヒル病院では緑を取り入れ、レクリエーションの設備を整えた、癌患者の憩いの場があり、そうして病院の中には教会が設置されていたのであった。ここに死に対する不安と患者自身の葛藤を和らげるホスピス精神が満ちあふれていた。今日、ターミナルケアなる言葉が一般的になり、誰もが理解されるが、その頃、北海道ではほとんど関心がないようであった。こうした環

境のもとで治療できる患者さんの喜びと生きがい、私に伝わってきて、素晴らしく思えた。ここで働く看護師らは明るく一生懸命で、患者さんは救われるし、治療以前の問題が大きいと思われた。先生は英語力が堪能で、私にとってもそれなりにその病院の特徴を知ることができて、心が燃える思いであり、カナダにおける大きな収穫の一つでもあった。

この時、カナダにおける多くのことが、これからの大学のターミナルケア教育への足場となり、その行くべき先が何であるかを知った。アルバータ州との医学交流が発展することに、果てしない未来への挑戦であると感じた。短期間であったが、先生との出会いの中で、人間のあり方、診療における医師の姿勢など、多くのことを学んだ。先生がこの旅の中で、どんなときも情熱あふれる説得力で多くの人たちと明日を語る姿に、私は深く心を打たれた。

こうしてカナダでの癌研究所病院を訪れ、帰学しての学生の末期癌ケアの講義、院内における臨床検討会などへと走り続け、1985年、和田学長のもと“医療を考える会”の設立へと進み、その流れで、ターミナルケアの道へと進むことができたのだと思う。「第23回日本死の臨床研究会」（1999年9月17日・18日、札幌で開催）を担当し、私どもは特別講演の一つに和田武雄先生を決定した。先生は、1999年1月31日に旅先での突然の死により、多くの方からのご心配がある中、これまで培われてきた先生のご意志を語るべく時を持ったのである（近藤文衛先生がまとめられた）。

こうして、たくさんのご指導いただいた、いまは亡き和田武雄先生へのご冥福をお祈りするとともに、次世代の人たちへのますますのご活躍を期待して、筆を擱く。

